

無麻酔で歯石をとる？！

どんな飼主さんでもご自分の犬や猫が全身麻酔で口腔内の処置をすることを心配されるだろうと思います。

一般には、口腔内の清浄化を行う処置は“歯石取り”などと言われ、爪切りと同じような扱いをされていることもありますが、正しくは、歯面に蓄積された歯垢や歯石を除去し、歯面を研磨して再付着を防ぐための処置で、後に続く、歯周外科処置、歯内処置、口腔外科処置などに先立って実施され、予防歯科処置と呼ばれます。ここでは、なぜ予防歯科処置が全身麻酔下で、トレーニングを受けた獣医師がすべき処置であるのかをご説明しようと思います。

日本の獣医学教育では、動物の全身麻酔に関する知識や技術は習得できるカリキュラムが各大学に準備されています。しかし、残念なことに獣医歯科学教育については、まだ十分とは言えませんが、いくつかの大学ではカリキュラムの中に獣医歯科・口腔外科を設けています。

日本小動物歯科学研究会では、15年にわたり毎年、口腔解剖・歯周病学・歯内治療学・口腔外科学について卒業教育セミナーを開催し、獣医師、動物看護師の方が獣医歯科・口腔外科の知識や技術をそれぞれの立場で習得する機会を設けてまいりました。また、一般獣医臨床家の集まる学会でも獣医歯科・口腔外科の教育講演、卒業教育セミナーなどできるだけ多くの先生方に基本的な知識と技術を習得する機会を作ってきました。受講された臨床獣医師、動物看護師の皆さんは適切な処置を施されていると思います。

近年、口腔内への施術は法律的にも許されていないトリマーや動物看護師、歯科衛生士などが、無麻酔で歯石をとることによる弊害が多発しています。無麻酔で、しかも口腔内の処置を実施するトレーニングを受けていない人たちによって行われる“歯石取り”なる行為が、いかに危険なものであるのかをご理解いただき、安全で、効果的、かつ適切な口腔内に関する医療行為をしていただきたいと切に願っています。

このことは、日本での状況が危惧されるばかりでなく、アメリカ獣医歯科学会のホームページでもトレーニングを受けていない人たちによる無麻酔でのスケーリング(Non-Professional Dental Scaling on an unanesthetized pet)がいかに危険で不適切な行為であるかが説明されていますので、これもご紹介しておきます。

- 1) 歯石は歯周炎の直接的な原因ではないので、歯石をとったからといって歯周炎を予防したことにも、治療したことにもなりません。歯周炎の原因は、歯垢(プラーク、バイオフィルムの一種)です。歯石中細菌の活性はほとんどなく、歯石の表面がデコボコしているために、歯垢が付きやすい環境を作る、すなわち二次的に歯周炎を引き起こしやすいと言えます。歯石をとっても、訓練を受けていないヒトが歯石を除去し、歯面のポリッシングや歯磨き指導をしない、鉗子などで歯面の歯石だけをとる といった行為により歯垢の付きやすい歯面を作ってしまう。
- 2) ハンドスケーラーや鉗子で歯石を取るのは、危険な行為です。これらの器具は、先端に刃物が付いていて、歯面ではよく滑ります。イヌやネコは動く、スケーラーは滑るので、歯肉や舌、口腔粘膜を容易に傷つけます。器具の使い方の訓練を受けていないヒトは、器具のコントロールができませんので、よりリスクが高くなります。鉗子で歯石を割って除去するときに、歯と一緒に折って露髄させてしまった例もあります。とれた歯石がのどに詰まったらこれも大変です。歯がぐらぐらしている状態で歯石をとろうとすれば、歯根を残したまま歯が折れる、あるいは顎の骨を折る危険もあります。
- 3) 歯周炎が発症していれば、歯肉の下(縁下と呼びます)にポケットを作っていたり、歯肉が後退して一部歯根が見えていたりします。ポケット内の歯垢や歯石を取ろうとして、炎症を起こしている歯肉にスケーラーがあっただけで出血が起き、痛みを伴います。歯肉より上に使うスケーラーでは、歯肉が傷だらけになり状態はさらに悪化します。歯肉が後退して一歯根が見えているところをスケーラーでいじっても痛みが生じます。痛みを感じた犬や猫は、術者を傷つけることさえあるはずです。このような危険な行為は動物に痛みばかりでなく恐怖感を与えることになります。ポケットができているところは、歯周炎の進行の最前線です。ここを清浄化して治療できなければ、歯周炎を放置したことと同じで、動物に恐怖や痛みを与えるばかりで、治療になりません。歯周炎を悪化させる原因を作ることにもなりかねません。
- 4) 上顎第 1~2 後臼歯、上顎の奥のほうにあつて、口をあけてじっとしていないとこの歯石を除去することはできません。乱暴にすれば、唾液線(耳下腺と頬骨腺)の導管の開口部を傷つけ、周囲の粘膜を傷つけるので、危険です。大きな血管を切ってしまうかねません。また、上顎歯の内側は、特に犬では、深いポケットを作りやすく、鼻腔への瘻孔が容易に形成される個所でもあります。この領域への無麻酔でのアプローチも危険です。さらに、下顎歯は、特に内側が歯垢が付きやすく、ここへのアプローチは舌があつて、舌下部には大きな血管や唾液線の導管も走っているので、無麻酔では、この領域へのアプローチは不可能でしょう。
- 5) 無麻酔で、上記のような行為を病院で行うと、家でのケアをしにくくなるが多くなるようです。病院ではじっとしていても、家庭では言うことを聞いてくれないし、口も触れないという声をよく聞きます。歯周炎の原因は歯垢中の細菌です。歯垢は数時間で歯の表面を覆います。定期的に歯垢を除去することが歯周炎の予防であり、それが一番の治療となります。家庭でもはみがきができるように指導すべきで、病院での痛みを伴う口腔内への行為はできる限り避けるべきでしょう。

アメリカ獣医歯科学会

アメリカとカナダでは、獣医師の資格を持たない人が歯科処置を行ったり、監督下で訓練された動物看護師が、獣医のライセンスのない施設で診療行為をすることは、法律で禁じられ、罰則が科せられます。

アメリカでも、訓練を受けていない人、あるいはライセンスを持たない人が、動物に対する口腔内の診療行為を無麻酔で実施することの危険性を以下のように説明しています。

- 1) 歯石は歯面に硬く付着しています。歯石を取るためのスケーリングは、超音波スケーラーや音波スケーラー、さらにハンドスケーラーを使って行われますが、ハンドスケーラーの先端は鋭い状態でないと歯石を除去できません。動物がちょっと頭を動かただけでも動物の口腔粘膜を容易に傷つけるばかりでなく、動物が痛みを感じた反応で、術者を咬むこともあります。
- 2) 専門家によるスケーリングとは、歯肉縁の上下を問わず、ついた歯垢や歯石を除去し、歯面を研磨することです。スケーリングで必ずしなくてはならないことは、歯周疾患が活動的であるポケット内（歯肉と歯根の間の歯肉炎直下）の歯面をきれいにするということです。ヒトの場合は患者が協力するので、無麻酔でも口腔内の専門医である歯科医によるスケーリングが可能になるのです。しかし、無麻酔で、犬や猫の一本一本の歯の縁下部のスケーリングは不可能です。目で見える範囲の歯石を除去することは、動物の健康維持にはほとんど効果がなく、きれいにしたような感じがするだけです。単に見ただけの効果しかありません。
- 3) カフ付きの気管チューブを挿管して吸入麻酔をすることは、3つの重要な利点があります。1つは、手技を理解できない動物を協力的にさせること、2つは検査時や施術中の患部組織の治療に際して発生する痛みを排除できること、3つは誤嚥から気道や肺を守ることです。
- 4) 専門的なスケーリング施術時に、口腔内検査は必要不可欠ですが、これは無麻酔では不可能です。特に、舌側の歯面を検査することはできませんし、患部や不快感をもたらすか所を容易に見逃してしまうでしょう。

イヌやネコに安全に麻酔あるいは鎮静処置を施すためには、動物の健康状態を評価し、身体の大きさに合わせて適切な薬用量を決め、継続してモニターする必要があります。

獣医師は、以上のすべての手技に精通しています。獣医師でない者が麻酔薬や鎮静薬を処方することも投与することもとても危険であり、違法です。麻酔は決して100%安全とは言いきませんが、今現在の一般的臨床医が実施している麻酔技術や健康状態の評価法は、リスクを限りなく小さくしているので、毎年、何百万回の歯科処置を安全に実施できているのです。